

れ、走は「全然違いますよ」と答える。

走は視線を落とした。下半身を覆いつくすように清瀬のスカートがふわりと広がっている。その裾から白いふくらみはぎが覗いていて、走はそっとそれに触れてみた。

やっぱり全然違つと思つ。しなやかで柔軟な筋肉に包まれた身体はもつと確かな存在感があつた。抱きしめるとそこにいるのだと強く感じる事が出来た。けれど、今の清瀬はどこもかしこもふにやふにやで走が触ればそれに合わせて形を変えようとした。

「走、走」

つい無言で撫でていたら、くすくす笑っている清瀬は首のつりを擦られた。

「で君はそのふにやふにやのプリンとするのかしないのか？」

「します、したいです」

「なら、早く脱がせて」

清瀬は甘えるように小首を傾げた。

走はぶわつと赤くなる。

「なんで今更赤くなるんだ、君は、酷いときなんて人が台所で夕飯の仕度をしているときや玄関先で脱がしてくるくせに」「や……なんか今のその顔……云われると……可愛すぎてわわわってなるっていつか、やっぱり犯罪者の気分っていつか」

清瀬は呆れた顔をしていたが、その口にしつとも走の手がふくらみから腰の方へと移動してきたのでそれ以上何も云わなかつた。どことなく走の左肩に頭を載せて身を任せ寄りかかっている。走はぎこちない手つきでワンピースの上で両手を彷徨わせていたが、やがて云い難そうに、「あの」と清瀬に声をかけた。

「これ、どうやって脱がすんですか」

「何度か俺の後ろに立つ機会があつたのにとつて君はファスナーの位置をチェックしておかないんだ」

清瀬は無然として走の肩から顔を上げる。いや、そんなのチェックしてる方がおかしいだろと思つたが走は賢明にも黙っていた。清瀬は軽く肩を纏めていたが、「ここにファスナーがある」と背中腕を回して指し示してくれる。

「あ、ほんとだ」

走はファスナーを見つけるとそれ以上下がらなくなるまでおろしていった。

が、そこでまた手が止まる。清瀬はにやにやとしか形容出来ない笑みを浮かべていた。なんでそんなむかつく表情をしているの可愛いんだと、走はいらうとしつとも、脱がしますからね「とぶつきらばつに宣言して細い肩紐に手をかける。

肩紐が走の手首ほどしかない。二の腕の半ばあたりまでずれたところでもた手が止まった。走は信じられないものを目にしたよ